

ともしびショップが育む 働く意欲・自信、地域とのつながり



「ともしびショップ（以下、「ショップ」）」は、「ともに生きる」福祉社会を目指す「ともしび運動」の一つの形として、平成元年に県庁に一号店が開店し、県内各地の公共の建物や公園などさまざまな場所に開設され、現在では四十九店舗へと広がりました。

今回は、身近な地域での理解や支え合いによって生まれてきたショップの実践として、障害のあるスタッフ（以下、「スタッフ」）の成長や支援スタッフの関わり、地域とのつながりの様子などを紹介します。

ともしびショップま木・自ら 解決できる力をつける

秦野市保健福祉センターの二階にある「ま木」は、スタッフ二名と支援スタッフ八名が働いています。支援スタッフは調理を担当し、スタッフは笑顔でその食事を客席へと運び接客しています。

「お昼前に売り切れてしまうことも珍しくありませんよ」混み合うレジで人気の日替定食をすすめるのは、地元のボランティアグループの方。開店から十三年目、その豊富なレシピから生まれる日替定食は、毎日食べても飽きない家庭の味として大人気。この日も早々に売切れ、客席は満席です。



家庭の味が人気の日替定食

スタッフですが、当初は「お冷」を頼まれても「水」と分らない、敬語を使えないなど、社会的経験が少ないうえ、周囲のサポートを受けながら、配膳方法から接客まで長時間の立ち仕事をマスターしてきました。意識的にプロとしての自覚を育ててきたという店長の相原和枝さんは、「お客さまからつらいことを言われたり、ストレスもたくさんあったと思います。それを乗り越えたのはスタッフの努力と仕事への誇り」だと言います。

「仕事は大変だけど楽しいことは多い。今では笑顔も自然にできるようになった」とスタッフの鳥海明日香さん。職場に出勤して身支度を整え、テーブルとイスを拭き、掃除を始め、お客さまがいない時間に食券やお箸入れを作るなど、自分で立てたスケジュールで黙々と準備を進めます。彼女に頑張れるコツを尋ねた



話が多いと嬉しいとお客さま、スタッフの鳥海明日香さん

ところ、「頭を使うこと」と笑顔が返ってきました。

信頼して仕事を分かち合えること。スタッフも支援スタッフも変わらない戦力として働くことができる。ショップでは、役割を分担し、それぞれが努力していくことで、それを実践してきました。

「誰でも仕事のやり方を否定されたら悲しくなる。誰かが代わった方が早くできるかもしれない。でも信用され、仕事を任せられることで、人は大きく成長します。結果的に『相手を信じて待つことが解決の早道』になることをスタッフから教わりました」と相原さんは言います。

見守って支えてくれる仲間がいる、仕事を分かち合い、自分の仕事に感謝され、モチベーションが上がります。さらに努力できる。その信頼関係と仕事のやりがい、人の成長を育む原動力となっていました。

ともしびショップきらら・ミニ ニケーション能力を身につける

「きらら」は、家族連れでにぎわう厚木市ほうさいの丘公園で、売店

と軽食店を運営しています。スタッフは三人、知的障害のある人と家族の会「厚木市手をつなぐ育成会（以下、「市育成会」）」の協力者や地域のボランティアなどの支援スタッフに支えられています。

「何かミスをした時、その場で固まってしまふスタッフの様子を何度か見て、困ったことを周囲に伝えることが怖いと感じていること、それを周囲に早く伝えられれば、トラブルを未然に解決しやすいことも分かった」と店長の風間陽子さん。

そのため、働き始めたスタッフには「困った時に自分から周囲に伝えられること」を最初のステップに、社会人としてのマナーやルールを学び、実践することで、就労の第一歩となることを目指しています。

子ども連れの方が多く、メニューに赤ちゃん用の飲み物や、全フードのアレルギー一覧表を用意。子どもだけで来ている場合には声をかけるなど、地域密着型のお店であることを常に心がけていきます。

障害のある方が働いていることを知らずに来店する方がほとんど



子ども向けに、屋外で遊べる水鉄砲やシャボン玉等の玩具、オムツも置いてあります